中世からの隠岐の歴史や人々の営みを伝える 村上家資料館

我こそは新島守よ隠岐の海の荒き波風心して吹け　後鳥羽院

承久３年（1221）､倒幕の兵をあげたものの鎮圧された後鳥羽上皇は、隠岐国の中ノ島へ配流されました。最初に着いた海士町の南にあたる崎地区で歌を詠むと、荒れた海も治まったとの言い伝えがあります。この時、公文（村役人の代表）として上皇のお世話をしたのが村上氏で、上皇亡き後は、「墓守」を務めました。

村上氏が西ノ島に居を構えた時期は定かでなく、瀬戸内の村上水軍の流れをくむとも言われており、中世以降、海士地域の有力者としての活躍が確認できます。

村上家住宅の東側丘陵に土塁をもつ廓が見られます。これは居館を含む一帯が因屋城跡で、毛利陣営として尼子の軍勢と戦った地でもあることを物語っています。村上家は島内外で新田開発を行うとともに、上方と隠岐間で海運業を営みました。村上家の事業は隠岐における海運業の先駆けともなり、全国の長者番付に載るほどの豪商となりました。

中世以来この地に屋敷を構えて居住してきた村上家でしたが、明治33年（1900）に火災による住宅の焼失後､現在の姿で再建されました。なお、この時焼失を免れた門は、後鳥羽上皇の行在所であった源福寺にあったものです。明治の廃仏毀釈で寺は焼失したため、この門だけが、19年間の上皇の暮らしを見続けた証人ともいえます。

海士町では村上家の建造物が町所有となったことで、平成21年から26年にかけて海士町村上家整備事業として建造物と庭園の改修工事を行い、明治末年の姿に復元しました。また寄贈された中世から江戸後期までの古文書から、村上家の歴史をはじめ地域や隠岐の歴史、さらには各地との交流など、この地域に暮らした人々の営みや社会のありようが読み取れます。

都を追われて19年余、隠岐で生涯を終えた上皇は、その後の移り行く隠岐の海をどのように見つめているでしょうか。

■位置図

村上家資料館　門
この門は元後鳥羽上皇の行在所の源福寺にあったものといわれる。寺は明治の廃仏毀釈で焼失した。

復元・整備された庭

村上家資料館
平成21年から平成25年にかけて復元整備を行い、平成26年に資料館として再活用

村上家資料館内展示
後鳥羽上皇愛用の品、古文書と共に小早川隆景からの感状がある